

ローマ人への手紙11章28-29節 「取り消されない召命」

1A 根なるイスラエル

2A 神との関係 28

1B 福音に敵対する者

2B 選びのゆえ愛されている者

3A 取り消されない賜物と召命 29

1B 神の賜物

2B 神の召命

3B 変わらない方

本文

ローマ人への手紙 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ローマ 10 章まで来ました。今日は、午後礼拝で 11 章を 1 節から 32 節まで一節ずつ見ていきます。今朝は、11 章 28-29 節に注目します。「²⁸ 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。²⁹ 神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。」

私たちは、ローマ 9 章から 11 章において、福音における中核の部分を見ています。それは、「イスラエルの救い」です。福音をイスラエル人は拒み、異邦人が受け入れていっている姿を見て、パウロは心の痛みを抱き、また彼らが救われることを祈りながら、ここの 3 章分を書いています。9 章においては、彼らが信じないのは神の主権があり、頑なにされているという側面があるからということのパウロは述べました。けれども、それで彼らに責任がないということではなく、信仰によって神の義を求めなかった、聞いたのに信じなかったという問題を取り上げました。

そして 11 章は、イスラエルが福音を聞かない状態のままではない。神が約束された通り、彼らは必ず救われるということを語ります。イスラエルは、決して見捨てられてない。神が一度選ばれた人々を、途中で見捨てることはならさらないということです。

1A 根なるイスラエル

私自身にとって、イスラエルのことを知りたいと思って長いこと経ちます。もう 25 年ぐらい前のこと、衝撃的なことがありました。妻と共にアメリカの首都、ワシントン DC に訪問しました。そこには、いろいろな見学できる記念館や博物館が数多くあります。その中で、ホロコースト博物館があります。気軽に、1 時間ぐらいで見終わるかな？と思ったら、ゆうに 3 時間ぐらいかかったでしょうか。前進しても前進しても終わりがありません。そして、ここまでか、というぐらい、起こったことを詳細

に展示しています。そして、私は出口のところにあった、聖書の言葉に圧倒されました。「イザ 43:10a あなたがたはわたしの証人」つまり、記念館の中であなたがたは、ホロコーストを目撃したのだ。あなたがたは、これらのことの証人となる、というメッセージだったのです。

私は、ユダヤ人が祖国を失って、流浪の民になるも、この世界に今に至るまで存在して、しかも、世界の超大国の首都中枢に自分たちの民族の歴史を知らしめる影響力さえ持っているのだ、と思いました。この力はどこに出ているのか？と、畏敬に近い思いを抱きました。

ところで引用されていたイザヤの預言ですが、本文の中の意味は、私が受け止めたのと意味が違いました。「あなたがたはわたしの証人」の「あなたがたは」は、ユダヤ人を目撃した人々ではなく、イスラエル自身です。イスラエルの民そのものが、わたしの証人なのだとイスラエル人に語っているところです。神を信じない世に対して、否が応でも、「わたしはある」と認めざるを得なくさせる証人が、イスラエルなのだということでもあります。聖書の神が、その存在が否定しようのない真理であるのは、被造物を見れば明らかだ、というのは、ローマ 1 章に書いてありましたね。同じように私たちは、イスラエルが神を証しするように立てられている民として、この世に対する証しとして興味を持ち続けています。

さらに、11 章では、私たち異邦人キリストが、イスラエルに対する神の取り扱いがまずあって、その取り扱いがキリストにあって私たちにも及んでいることを知るのである。神の選び、召し、神の愛、神の救い、義と認められること、平和、聖霊の助け、希望、これらのものが、元々はイスラエルに対するものであり、そこから私たち異邦人は、キリストにあって養分を吸い取っているということなのです。イスラエルを見れば、自分自身がキリストにあってどのようにしてくださっているかを見ることができるのです。イスラエルが私たちのルーツ、根っこであり、その逆ではありません。ですから、イスラエルに対する約束はもはや無効になっていて、今のイスラエルは関係ないと考えることはできません。そうであれば、キリストにある神の私たちに対する約束も、無効になりえて、私たちも神には関係なくなる、ということの意味します。イスラエルが今も神に愛されて、神によって救われるからこそ、私たちに対する神の選びと召命も変わらないことが確かになるのです。

2A 神との関係 28

28 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。

イスラエルについての複雑さ、二面性をよく表しています。神に敵対しているのに、神に愛されているのです。イスラエルの問題を考える時は、いつも悩みます。それは、人間的な論理では、矛盾しているように見えるからです。イスラエルが反抗して、神に敵対的であるようで、けれども、神は愛しておられる。彼らは呪われているようで、実は祝福されている。ユダヤ人たちのしていること

は、自らに滅びを招くようなことをしているようでいて、実は救われている。そこには、神の深い知恵があります。

私たちの思いを超えたところにあるご計画があります。私たちが早急に、裁いてはいけません。私たちは9章の学びで、人々があまりにも裁くのに早い問題を取り上げました。誰が救われて、救われていないか、私たちの理解や判断で決めつけてしまうのです。しかし、イスラエルは、そうしたことがすべて理解を超えた神の領域のことなのだということを教えてください。

1B 福音に敵対する者

「**彼らは、福音に関して言えば**」とあります。私たちはこれまで、このことをずっと学んできたので、もう理解していることでしょう。イスラエルの救いのための良き知らせだったのに、それを彼ら自身が拒みました。私たちは、ユダヤ人たちが福音を拒み、敵対しているのを福音書にて、また使徒の働きにて見えています。それだけを見たら、彼らは裁かれて当然だとなります。それだけを見たら、ユダヤ人は神に見捨てられた民となったのだと結論づけることができます。しかし、それが全くできないのです。

「**あなたがたのゆえに、神に敵対している者です**」とあるのです。あなたがたのゆえに、つまり私たち異邦人のゆえに、ということです。パウロは11章でこのことをじっくりと論じています。私たちは、神が、イスラエルがあまりにも頑ななので、しびれを切らして異邦人に救いを与えたと思ってしまう。いいえ、実は織り込み済みだったというのです。

神はユダヤ人を今も愛しておられ、彼らが拒むことを前もって知っておられて、彼らの拒否を通して、異邦人に救いの道が開かれるように用意しておられるのです。彼らが頑ななので、見捨てたのではなく、頑なであっても決して見捨てず、永遠の昔からのご計画で、異邦人に救いを与えるのだけれども、ユダヤ人の間だけでなく、ユダヤ人から異邦人に福音を伝えるように意図しておられました。けれども、ユダヤ人がそのまま福音を受け入れていたならば、自分たちの間だけで信じるだけで、異邦人に伝えることはなかったでしょう。しかし、彼らが頑なになったので、それで異邦人にも福音を伝えるようになっていったのです。思い出してください、ユダヤ人たちがエルサレムから離れて、ユダヤとサマリア地方に行き、それから地の果てに宣教に行ったきっかけを。ステパノの殉教です。ステパノがエルサレムで殺されて、迫害が一気にエルサレムのユダヤ人の信者たちに及んだので、それからサマリアにピリポが福音を語り、ペテロは、もっと広範囲を巡回して、ついにカイサリアのコルネリウスの一家に福音を語って、彼らが聖霊のバプテスマを受けたのです。他の者たちはさらに北上して、そこでギリシア人にも福音を語り始めました。すると大勢が信じました。アンティオキアの教会がそうして始まったのです。

神はこのことを織り込み済みだったのです。神はユダヤ人のことをあまりにも愛しておられるか

ら、彼らが福音を信じないという失敗さえお用いになり、異邦人に救いを及ぶご計画を予め立てておられたのです。

それだけではありません。ユダヤ人があれだけキリストの弟子たちやパウロに迫害をしたのは、異邦人に救いが及ぶのを見て妬んでいるからです。自分たちだけの信仰であれば、彼らは、まだ大人しくしていたことでしょう。ところが、異邦人が異邦人のままで救われることを見て、それで非常に怒ったのです。その妬みは裏返すと、自分に永遠のいのちが与えられていないことを示しているものでした。相手に対する強い反応は、実は自分自身にそれがないことを示すものでした。ですから、彼らが妬むことによって、その中の幾人かがむしろ主に立ち返ることがあるのです。その筆頭がパウロです。彼の激しい迫害は、裏返すと、自分の良心に神の語りかけがあったからです。

ですから、福音に敵対しているのは、見捨てられるため、倒れるためではなく、神が異邦人を救い、それからユダヤ人をも救おうとするために起こっていることなのです。ここまで神は計算ずくめで、事を行われています。

2B 選びのゆえ愛されている者

そしてパウロは、「**選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者**」と語っています。私たちは何度となく、神の選びは優れているからではなく、神に愛されているからということを見てきました。「申 7:7 【主】があなたがたを慕い、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実あなたがたは、あらゆる民のうちで最も数が少なかった。」そして私たちに対する、キリストにある選びも、優れているからではない、むしろその逆であることを、パウロはコリント第一で論じました。「I コリ 1:26-28 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。28 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。」

そして、その選びは、どこから来ていたのでしょうか？「**父祖たちのゆえに**」とあります。アブラハム、イサク、ヤコブですね。彼らの父祖です。彼らを神が選ばれて、彼らから出たイスラエルの子孫を神は愛しておられ、選ばれていました。彼らがいかに神に愛されているか、神がご自分のことを、彼らの名をつけて呼ばれることを選んだところからもわかります。「出 3:6 わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」あれだけいろいろな失敗をした、アブラハム、イサク、そしてヤコブですが、しかし神はそう呼ばれることを恥とするどころか、誇りに思っておられるのです。神との関係が、行いにはよらず、ご自分との愛のゆえであることがよくわかります。彼らにあった財産は信仰です。一途に神を信じていた信仰です。ヘブル 11 章 16 節には、こう書いてあります。「しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷

でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥とнаさいませんでした。・・」

その愛に基づく選りによって、イスラエルは今も愛されています。私たちはとかく、イスラエルに対する神の厳しさを見る時に、神はイスラエルを憎んでいるのではないか？と思ってしまうことがあります。いいえ、神のイスラエルに対してなされることは、すべてが愛から出ています。その厳しさの中に、神の熱情があるのです。もし、イスラエルをあきらめていれば、逆に彼らがイスラエルでなくなるように、周りの異邦人の間に同化させればよいのです。イスラエルがイスラエルでなくせばよいのです。むしろ彼らが厳しさを通っているのは、むしろ神が彼らに強い関心があるからで、彼らをなんとかして救いたいと願われているからです。苦しみや痛みは、神に憎まれているのではなく、むしろ愛されていることの証拠なのです。

冒頭で、ホロコーストの話をしました。確かに、ホロコーストによってユダヤ人の人たちは、神が何でこんな仕打ちをするのだろうかと思いを信じることをやめ、無神論者になった人たちもいます。けれども、そのホロコーストによって、当時、ユダヤ人たちが国を創りたいと願っていたその願いを、国連の総会で国際的に認められたのです。あまりにもその惨状がひどいことが世界に知られるようになって、それで同情が広がったためであります。紀元 70 年に世界に散らされたユダヤ人は、民族にとって最も恐ろしいホロコーストを通して、神が自分たちに国を与えてくださったことを知っているのです。

私たちは、イスラエルを通して何度も、何度も、神の愛とは何かを教えられます。それは、やわらかな言葉、ロマンチックな言葉のような安価なものではなく、神の主権に基づくものなのだということが分かります。ヨセフが、兄たちが自分を売ったことを完全に赦しましたが、それは、神がヤコブの家族を飢饉から救うために、予めヨセフをエジプトに遣わすようにされたということを知りました。それで赦すことができたのです。同じように、神の主権があります。理解を超えた主権があります。そこにおいて神はご自分の愛を示されるのです。十字架の愛もそうですね。

3A 取り消されない賜物と召命 29

そこでパウロは、「²⁹ 神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。」と言っています。イスラエルに対する神の賜物、恵みは取り消されることはありません。召命は取り消されることはありません。今、アメリカではキャンセル・カルチャーという流行があります。過去に、奴隷を酷使したとか、そういった歴史的人物について関わりのあるものすべてキャンセル、取り消すという運動です。けれども、神は真逆の方です。イスラエルがどんなに汚点のあるような歴史を持っていても、神は決してその賜物と召命をキャンセルされるような方ではないのです。

そして大事なことは、私たちに対しても、その賜物と召命が取り消されることはないということです。賜物と召命、どちらも王のような上位にある方が、下にいる者に授けるものです。王が、恵みを施

し、賜物を与えます。そして王が召命、つまり、人をご自分のしもべとし、ご自分の命令に従うようにされたのです。私たちは、現代は自由と選択、好みが尊ばれる社会と文化に生きています。それによって、何でも自分で選べると思っています。けれども、選べないものがあります。親は選べません。自分の身体も選べませんね。ところが、何でも選べると思って、例えば男性が女性に、女性が男性に変えられるとさえ思っています。そういった文化に生きていると、自分が誰かの所有物であり、しもべであり、その主人のために生きていくということが分からなくなるのです。しかし、キリスト者は、神の賜物と召命によって生きています。自分の選択ではなく、神の選びと召しによって生きていくのです。

1B 神の賜物

賜物という言葉が聖書でたどっていくと興味深いです。ローマ書の中では、永遠のいのちが与えられることが、賜物としてあります。「5:15 しかし、恵みの賜物は違反の場合と違います。もし一人の違反によって多くの人が死んだのなら、神の恵みと、一人の人イエス・キリストの恵みによる賜物は、なおいっそう、多くの人に満ちあふれるのです。」そして「6:23 罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」恵みによって、義と認められることも、神の賜物であるとパウロは話しています。「5:17 もし一人の違反により、一人によって死が支配するようになったのなら、なおさらのこと、恵みと義の賜物をあふれるばかり受けている人たちは、一人の人イエス・キリストにより、いのちにあつて支配するようになるのです。」これらのものが、決して取り消されることはないのです。キャンセルされることはないのです。

2B 神の召命

そして、神の召命については、ローマ 8 章で見ました。「8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」ご計画にしたがって神の召されている人たちのために、万事益としてくださいます。「8:30 神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」御子と同じ形に予め定めくださっており、その者たちを召してくださいました。そして、その召してくださった者を義と認めて、栄光をお与えになったのです。

3B 変わらない方

神は、まるで人間であるかのように、途中で変わるかたではありません。途中で放棄するのであれば、初めから選ばれません。予め知っていて、予め決めておられるからです。「I サム 15 章 15:29 実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔やむこともない。この方は人間ではないので、悔やむことがない。」福音を拒んでいるからといって、途中で放棄するならば、神は予めイスラエルを選んだりしません。その選びによって、私たちが選ばれているのだということを知っていきましょう。主が世の終わりまで、共におられますように。